慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	記憶と規範のフィリピン : 織田作之助『わが町』論
Sub Title	
Author	尾崎, 名津子(Ozaki, Natsuko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	三田國文 No.54 (2011. 12) ,p.17- 36
JaLC DOI	10.14991/002.20111200-0017
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20111200-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

記憶と規範の〈フィリピン〉

――織田作之助『わが町』論――

尾崎　名津子

1　『わが町』の成立

織田作之助『わが町』の成立には、映画界の人々との関係が影響している。まず、織田の小説「立志伝」（「改造」昭和十六年七月）を読んだ溝口健二監督がこれを気に入り、松竹京都撮影所を通して織田に映画の原作執筆を依頼した。杉山平一宛織田作之助書簡[1]（昭和十七年五月二十七日）には「目下溝口映画のシナリオを執筆中」とある。その四ヶ月後、昭和十七年九月二十二日付杉山宛書簡では「映画の原作は「文芸」十一月号にのせることにした」と書いている。これが「文芸」昭和十七年十一月号に掲載された「わが町」である。その後「わが町」は大幅に加筆した形で、昭和十八年四月三十日、大阪の錦城出版社から刊行された。加筆部分は、織田自身の先行作品『夫婦善哉』（「海風」昭和十五年四月）と『婚期はずれ』（「会館芸術」昭和十五年十一月）を再録したものだが、一方、「文芸」版「わが町」には登場しない主人公他吉の妻・お鶴や、他吉との再婚を望むオトラ婆さんが登場するという、単行本版独自のプロットがみられる。[2]

一連の杉山平一宛書簡には『わが町』に関する記述が少なくない。単行本刊行後にあたる昭和十八年六月四日付書簡には、「わが町批評ありがとう。映画にするために無理が多かった。ベンゲットの他吉は、はじめ「刺青の他あやん」にして置いたのだが、シナリオライターが「我慢の他吉」乃至「マニラの他吉」にしたので、あわててベンゲットの他吉にしたのだ。／俥のあとへついて走るのは、すこし無茶だが、溝口の注文なのだ。溝口は「立志伝」のれいの俥のくだりが気に入っているのだ」とあり、『わが町』が織田以外の人間の意向を取り入れながら成立していった経緯が示されている。また、昭和十九年五月三十日付書簡には「小生さいきん一つシナリオ書いた。わが町を脚色したのだ。溝口かマキノ正博の予定」ともある。しかし、溝口たちによる映画化は実現されなかった。そこには、戦局の悪化によってフィリピンのもつ意味が急激に変わったことなどの理由も考えられる。映画化を果たしたのは日活にいた川島雄三監督で、時期を昭和三十一年まで待たねばならない。

このように映画界との関係、プレテクスト「立志伝」の存在、過去の自作の取り込み、「文芸」版との差異など、『わが

町』の成立経緯は単純ではない。

明治時代にフィリピンのベンゲット道路開鑿工事に従事した佐渡島他吉のその後の生涯を、同じ大阪の「河童路地」に住む人々の姿を関わらせながら、明治・大正・昭和の三代にわたって描いた長篇小説を昭和十八年という時期に発表する背景にどのように時局が反映され、また作中に頻出する「フィリピン」がどのような場所として表象されるか、言いかえれば、土地をめぐる記憶とその継承という事態の内に人がいかに主体的に土地と自己存在とを結ぶか、という点をめぐって、テクストに即して具体的に検証することにしたい。

2　ベンゲット移民異聞

『わが町』の第一章「明治」は、他吉が参加したベンゲット道路建設工事に関する記述が、そのほとんどを占めている。青山光二[3]はこの作品を、「便乗的粉飾をかなりほどこした作品」、「南方作戦下の国状を大いに意識して書かれたと思われる」と評している。太平洋戦争における日本軍のフィリピン侵攻は昭和十六年十二月八日、太平洋戦争開戦と同時に始まり、翌昭和十七年一月二日にマニラを占領した。コレヒドール島での全アメリカ軍の降伏が完了した同年五月十日を以て攻略は終了し、『わが町』刊行時のフィリピンは日本による統治がなされていた。ちなみに昭和十九年十月からは、アメリカを中心とした連合国軍がフィリピン奪回作戦を敢行することになる。

遡って明治三十一年、スペインからアメリカにフィリピンの植民統治権が譲渡された。その後に避暑地バギオに通じる道路を作るというアメリカの発案で、ベンゲット道路が明治三十四年に着工され、三十八年三月に開通した。『わが町』本文では、建設が難工事であったこと、アメリカや中国など列国の人間がなし得なかった工事を日本人が成功させたことが強調されている。この日本人、所謂ベンゲット移民が明治三十六年十月から工事に従事したことは史実である。しかし、『わが町』で述べられるような「この工事は他国人の手には負えなかったが、日本人には成し遂げることができた」という文脈は、史実としてどの程度まで保証されるのだろうか。

早瀬晋三[4]は、「現在利用できるベンゲット道路工事当時の日本の外交文書のなかに、「日本人によって完成されたベンゲット道路」の記録もなければ、「日本人七〇〇人の人柱」の記述もない」ことを明らかにした上で、戦中から現代に至るまで語り継がれる[5]ベンゲット移民にまつわる「伝説」の成立過程を検証している。日本だけでなく、アメリカ、フィリピンに残されたどの史料にも、工事に関する一次史料はない。アメリカの場合は公式文書が保存機関の火災によって消失したという事情はあるが、公式文書以外でも、アメリカ人によって書かれた文献に日本人労働者の記述はないのである。この点に関して早瀬は「日本人のフィリピンへの渡航は、当時非合法であった契約移民という事実を隠すために、形式上、種々の方法がとられ」た結果だとしている。結局のところ、現実のベンゲット移民は、植民地経営を展開するアメリカ人に雇用された外国人労働者に過ぎない。では日本におけるベンゲット移民の伝説はどのように構築されたのだろうか。

早瀬の調査を参照すると、大正期に書かれたフィリピンに関する文献では、ベンゲット移民について特別な注意が向けられた事実はなく、少なくとも活字として残されることはほとんどなかった。昭和十三年に刊行された入江寅次『邦人海外発展史』（移民問題研究会）、蒲原廣二『ダバオ邦人開拓史』（日比新聞社）という二冊の書物を嚆矢として、フィリピン関連書籍が昭和十年代後半になると増え、その潮流の中で元移民の回顧談が披露されるうち[6]に、優秀な日本人たるベンゲット移民像が形成された。その過程では、証言のなされた時代が下るにつれて工事中の死亡者数が増加するといった形で工事の悲惨さが強調され、ベンゲット移民の物語が固定化されていった。そして第五期国定修身教科書『初等科修身　四』（第六学年用、昭和十八年）の教材に採用されることによって伝説は完成された、と早瀬は結論づけている。

だが、『わが町』刊行と同じ昭和十八年に伝説が完成されたとしても、織田が当時どの程度までそれを知っていたのか、あるいはいつその情報を手に入れたのか、ということは測定し難い。大阪府立中之島図書館の織田文庫には、織田の逝去時に残されていた雑誌書籍等が収められているが、その中にフィリピンを含む南洋に関する書籍は五点ある。刊行順に列挙すると、①台湾南方協会編『南方読本』（三省堂、昭和十六年十一月十日）、②花園兼定『南進論の先駆者菅沼貞風』（日本放送出版協会、昭和十七年二月二十八日）、③野村愛正『ダバオの父　太田恭三郎』（偕成社、昭和十七年六月一日）、④渡邊薫『フイリツピン図説』（富山房、昭和十七年七月二十日）、⑤読売新聞社出版部編『比島作戦』（昭和十七年十一月八日）である。うち⑤の刊行は「文芸」版「わが町」と同月である。これらを見ると、④渡邊本に一箇所だけ、左の一文に万年筆で傍線が引かれている。

是（明治二十四年―引用者注）から暫く杜切れた日本人渡航は、一九〇〇年に着手されたツウキンピーク、バギオ間二一哩三五のベンゲット道開鑿に当り、米支比人失敗の後を受けて時の工事監督ケノン少佐は、一九〇三年六月十八日マニラ日本領事館を訪問して邦人労働者供給方を乞うた。

この書き入れを以て織田のベンゲット移民の発見と見做すのは安易にすぎるが、結論を先に述べるなら、『わが町』のベンゲット工事に関する記述は、そのほとんどがこれらの本、特に③野村本、④渡邊本の文章を繋げて構成したものなのである（〈**資料**〉参照）。

したがってベンゲット道路工事に関する記述を除いた部分を検証することはテクストのオリジナリティを見定めること以上に、同時代の歴史化された語りと創作との齟齬を検証する作業となるだろう。ベンゲット工事に関する創作部分は、その内容に即して三種類に分けられる。以下、引用文の傍線は全て引用者による。

まず、労働者が殉職した仲間を弔う様子が詳細に記述されると共に、その死を「犬死にしない」ための〈弔いとしての工事〉という意味の補塡が挙げられる。具体的に挙げると以下の部分が該当する。

① 佐渡島他吉が、／「言うちゃなんやけど、今日まで命があったのは、こら神さんのお蔭や。こないだの山崩れでころッと死てしもたもんやおもて、もういっぺんベンゲットへ戻ろやないか。ここで逃げだしてしもてやな、工事が失敗になって見イ、死んだ連中が浮かばれへんやないか。わいらは正真正銘の日本人やぜ」／と、大阪弁で言った。

② 元通り工事は続けられたが、斃れた者を犬死ににしないために働くという鶴田組の気持は、たちまち他の組にも響いて、何か殺気だった空気がしんと張られた。／屍を埋めて日が暮れ、とぼとぼ小屋に戻って行く道は暗く、しぜん気持も滅入ったが、まず今日いちにちは命を拾ったという想いに夜が明けると、もう仇討に出る気持めいてつよく黙々と、鶴嘴を肩にした。

③ 難工事を、われわれ日本人の手で成しとげたのだという誇りはあっても、喜びはなかった。

〈他国人にはできない事業を完遂した誇り高き日本人〉像は、当時の一般化されたベンゲット移民の伝説と重なる形で反復されている。だがテクストにおいて強調されるのは仲間の死とその弔いであり、「喜びはなかった」という高揚なき達成が、結果的に提示されている。この事態は同時代におけるベンゲット移民伝説の論理と、必ずしも一致しない。たとえばベンゲット移民伝説の完成形とされている『初等科修身　四』（昭和十八年）は「教材の趣旨」を次のように伝えている。

南方発展の心構に強く資せしめようとするところに、本課のねらひがある。（略）わが先蹤の人々が、遠く海外に発展する意気と実力を備へて、偉大な足跡を印し来つたことも、この立場（「皇国の道は実に古今に通じて謬らぬといふだけでなく、国の外に施して悖らざる世界の大道である」との立場―引用者注）に於いて理会さるべきである。それらは、単なる人口問題の解決、ないしは一攫千金をめざしての自我功利の思想に由来するものではなかつた。

南進を称揚する国家にとって、ベンゲット移民は皇国のために尽力し、他国の人間に優り、成功あるいは勝利を収める臣民でなければならない。しかし『わが町』での彼らは臣民たる「日本人」であることを否定こそしないが、「喜びはなかった」という高揚なき達成を迎えている点で、臣民を鼓舞するための伝説として十全に機能するものではない。移民たちの行動を支える論理が「仇討」というきわめて近世的な概念であることにも目を向けなければならない。さらに、工事の完遂で終わる修身教科書的な伝説とは異なり、『わが町』では事後の出来事も詳述される。それが以下の二点である。

まず、ベンゲット道路の用途に関する記述が挙げられる。すなわち、犠牲者たちの墓標ともいうべき道路は、実際にはアメリカ人に娯楽を提供する手段として用いられたとする記述である。史実では、道路開通後のバギオにはアメリカ合衆国政府の諸機関が建てられ、夏の間は避暑地であるバギオで執政がなされたという。織田が参照したであろう文献にも、「その後、バギオには、美しい家々が、濃い緑の森の中に点々と絵のやうに立ちならんで、東洋第一といはれるサンマー・キャピタル（夏の都）ができあがり、アメリカ総督の官邸もあつて、四月から

八月までの五ヶ月の間は、こゝに政庁がうつつて、一切の政治をとるやうになつた」（③野村本九十八頁）と、バギオが政治の舞台となったことが書かれている。無論、滞在するアメリカ人のために慰安施設もあったことは想像に難くないが、『わが町』では史実よりも想像の方が「物語内の歴史的事実」として優先され、この操作によって、アメリカ人の営みが、生き残ったベンゲット移民にとって侮辱的行為とみなされることになる。以下に該当箇所を引用する。

① ベンゲット道路がダンスに通う米人たちのドライヴ・ウエーに利用されだしたという噂が耳にはいった。／そんな目的でおれたちの血と汗を絞りとっていたのかと、皆んなは転げまわって口惜しがり、工事が済むといきなりおっぽり出されたことへの怒りも砂を嚙む想いで、じりじり来た。

② （他吉の発言―引用者注）「こらッ。ベンゲット道路には六百人という人間の血が流れてるんやぞオ。うかうかダンスさらしに通りやがって見イ。自動車のタイヤがパンクするさかい、要心せエよ。

ここに描出されるのは、難事業を成功へ導いたにも拘わらずアメリカ人に侮辱された怒れる日本人像である。だが、『わが町』の記述から抜け落ちている事実がある。それは彼ら移民が本来非合法のうちに渡航した契約移民、換言すれば不法就労者だったということだ。根本的な政治上の問題は、いわば棄民となった彼らに、今度は否応なく経済上の問題を抱え込ませていくことになる。

『わが町』が先行文献に拠らなかった部分の三点目は、政治的前提を捨象し、経済をめぐる問題のみを佐渡島他吉の心身に密に関わらせる形で描出した部分である。

工事後の移民たちは「翌日からひとり残らず失業者」となり、マニラを彷徨うこととなった。新しく生じるのは持てる者が勝つという資本主義経済に基づく苛烈な生存競争である。その中で「ベンゲットの他あやん」は誕生している。工事における身体レベルの生存競争に打ち克った他吉は、その後の新たな争いをいかに生き抜いたのか。他吉に焦点化すると、実は「明治」の章の記述においては、彼が工事に寄与したことよりも、むしろ工事終了後、彼のアメリカ人に対する反抗が同じ日本人からの敬遠につながり、商いにも失敗し、果てはフィリピンに居られなくなった者として、本人の意図せぬ理由で日本へ戻る、という内容が主眼となっている。該当部分を引用する。

「文句があるなら、いつでも来い。わいはベンゲットの他あやんや」／それで、いつか「ベンゲットの他あやん」と綽名がつき、たちまち顔を売ったが、そのため敬遠されて、やがて僅かな貯えを資本にはじめたモンゴ屋（金時氷や清涼飲料の売店）ははやらなかった。／国元への送金も思うようにならず、これではいったいなんのために比律賓まで来たのかわけが判らぬと、それが一層「ベンゲットの他あやん」めいた振舞いへ、他吉を追いやっていたが、やがて「お前がマニラに居てくれては……」かえってほかの日本人が迷惑する旨の話も有力者から出たのをしおに、内地へ残して来た妻子が気になるとの口実で、足掛け六年い

た比律賓をあとにした。

「明治」の章は「ベンゲットの他あやん」誕生譚といえるが、そこに浮上するのは他吉が名実共に、成功すべくフィリピンへ渡った日本人としては敗れ去った者だという物語内の事実なのである。資本主義システムの中で負けた彼には、「仇討」の論理で獲得した誇りだけが残ったのである。

そのことと同時に明らかなのは、「ベンゲットの他あやん」としての他吉像はアメリカ人に反抗するパフォーマティヴな身振りとして生成されたこと、またそれが他ならぬ同胞たちから他吉を排除する要因となったことである。彼は、作品内外の同時代に伝説として共有されていたような、皇国の臣民にとって輝かしい成功を遂げた、海外雄飛する日本人であることを挫かれる。「明治」の章は、伝説に範を取りながらも位相の異なる二つの生存競争を描出する方向へ拡張し、そのことが佐渡島他吉という固有の身体に焦点化することを可能にする。身体では勝ったが経済では敗れ去った――これが他吉の自己同一性の核心といえるが、本人の内では身体での勝利と、敗残のうちに形成された身振りだけが誇りとして矛盾なく統合されるという、ねじれた認識が形成されている。また、それを保持することが、自身の過去の存在証明となる。だからこそ他吉は帰国後もマニラ麻の上着を着、「ベンゲットの他あやん」を自称し、かつ名指され続ける。しかし、それは彼の常態ではない。彼が「ベンゲットの他あやん」であるのはいかなる時で、また、彼のフィリピンの記憶はどのように反芻されているのかをみていきたい。

3　規範化される土地の記憶

他吉が「ベンゲットの他あやん」と称し、称される時と、フィリピン時代の記憶が語られる時とは弁別される。前者は他吉が外界と接触する際に発動する身振りであり、後者は他吉自身の言葉による思惟の開示だからだ。ゆえにここではその態度と回想が叙述される箇所を分けて検討したい。

「ベンゲットの他あやん」の風貌は、眼光鋭く、「凄み」を利かせる点で生涯一貫している。夜店で悪い場所をあてがわれた時、人力車の客を奪い合う時、その態度は現れ、彼は大声をあげる。青山光二は「立志伝」の他吉と比較し、「本来は博奕や喧嘩が何より好きであるはずの、他吉の性格の無法人的な一面が抑えられすぎていはしまいか」[7]と評しているが、確かにそのような性格の要素は抜き取られている。他の人力車夫に囲まれた際「咄嗟に「ベンゲットの他あやん」にかえって身構えた」ところに顕著なように、「ベンゲットの他あやん」の無法人的な性格に見えるものは、彼の常態ではなく、演技の成果なのである。

また「マニラ帰りらしい薄汚れた麻の上着」も演出に一役買っている。この上着は人力車を引く他吉のトレードマークでもあり、死の瞬間まで纏われていた衣装だった。「マニラ麻の白い上着」には、他吉が単にフィリピンにいたことを示す以上の意味内容が含まれている。同時代の資料によれば、マニラ麻とは「甚だ軽く而も強靱で特に海水に対する耐久力に富んで」いて、「産額の約七割は綱索及び紐縄に用ひられる。上級品は眞

田として婦人帽の原料に供する他、衣服用織物を製し、又蚊帳、帯、紐等に作られ、下級物は日本紙の原料として歓迎される」（前田由之助「ダバオに於ける麻栽培と邦人」（「海を越えて」昭和十六年二月一日）と説明される素材だ。名前の通りフィリピンで収穫される植物だが、その生産を事業として成功させたのが、フィリピンにいた日本人なのである。前田はさらに、「ダバオが、今や比島有数の新興産業都市として内外の汽船が盛に発着する殷賑さを呈するに至つたのは、我が邦人開拓者の力であると云つても敢て過言では無い。（中略）（アメリカ人、スペイン人が―引用者注）多少共開拓の緒に就いてゐた事実は認められるが、ダバオの麻産業を育て上げて今日に至らしめたのは実に邦人移民の力に外ならないのである」と、外地の産業を振興させた功労者として日本人を称揚し、海外雄飛ののち他国人を圧倒する邦人移民像と、その象徴としてのマニラ麻という記号を提示している。

同様の言説は織田文庫に収められている①『南方読本』にも認められる。同書は「ダバオに於ける麻事業が、その生産・貿易・海運・消費等あらゆる分野に於て断然他国を圧倒してゐることは、躍進日本の姿を如実に現してゐるものといふべく、我等国民の誇として刮目すべきものがある」と、前田よりも明確に、ダバオの麻事業が持つ意味を述べている。即ち他吉が常に纏うマニラ麻の上着は、『わが町』執筆・刊行の同時代において海外を圧する、成功した日本人の象徴といえる。

だが、『わが町』の中で他吉の上着は語り手によって「異様な風態」と指摘され、作中人物の町医者も「変な上着を脱ごうとしないのがけしからぬ」と他吉を解雇してしまう。成功した日本人の象徴であるはずのマニラ麻が「異様」と意味づけられる理由はいくつか考えられるが、確実なのは、他吉の身体が物語内外の時空いずれとも違和を生んでいる、ということである。マニラ麻の上着は他吉にとって〈フィリピン〉の象徴として、そこへの帰属を外界に示すための装置であるはずだ。しかしその身振りによって彼の身体はさまざまなレベルで異物として晒される。ゆえにフィリピンを触媒とした外界との折り合いは、言葉によってつけられることになる。

たとえば孫娘夫婦に自分の貯金を渡そうとしたが「お祖父ちゃんの葬式金に残しといて」と断られた後、「げん糞のわるいことを言うな。葬式金を残すようなベンゲットの他あやんや思てるのか」と声を張り上げるように、「ベンゲットの他あやん」の自称は、周囲の人間が提示した事柄や反応に反撥するためになされる修辞[8]といえる。

彼は「ベンゲットの他あやん」を産んだはずのマニラの苦い記憶、つまり喧嘩を繰り返した挙句、同胞の声によって追い出されたという事実を召喚せず、ベンゲットのことだけを思い出す。「はげしい労働」を懐かしみ、折あらば行きたいと願うと共に、周囲の人間に「苦労」して、「体を責めて働く」ことを、ことある毎に推奨・強要するが、語り手はそれを、他吉の「無智」ゆえであり「理屈ではな」いとする。「体を責めて働」けば、ベンゲットでの自分のように他国人にはできない難事業を成功させられる、あるいは修身の「教材の趣旨」にあったように、「皇国の道」が「国の外に施して悖らざる世界の大道」で

あることを証明できる、などという名誉欲や大義をもたらす論理を以て、彼は他者に対しているのではない。

他吉にとって〈フィリピン〉とはあくまで記憶の場であり、マニラでの苦さを忘却した上で繰り返し回想される、神話化された過去である。記憶は現在との距離と独立を保つと同時に、「体を責めて働いた」という一点が抽出されることにより、他吉にとって生の規範となる。整合性や妥当性を問うことが不可能な領域に、それはある。また、フィリピンでの出来事それ自体も、他吉に精選されたうえで他者に規範の順守を要求する際の訓話となったのである。

他吉は再び彼の地へ戻ることを熱望しながら、しかし現実に再渡航することは実現されずにいる。むしろ渡航の実現不可能性が、彼が〈フィリピン〉を尽きない夢として繰り返し反芻することを可能にするといってもよい。しかし、大正時代に入ると異郷にまつわる記憶に情報が追加され、他吉にとっての〈フィリピン〉という概念にも大きな変更が認められる。その契機は娘婿・新太郎の死によってもたらされる。

そもそも他吉は思いつきで自分のフィリピン行きを新太郎に代行させた。しかし、新太郎が現地に着いて早々病没すると、他吉は「わいが殺したようなもんや」という自覚から、新太郎を悼むことに心を砕く。そして〈フィリピン〉への欲望は、ベンゲット時代のように「はげしい労働」を享受することから一転、マニラに赴き新太郎の墓へ参ることへとシフトしていき、果ては新太郎と「いっしょの墓に入る」ことを所望するようになる。新太郎の死は記憶となり、他吉のとっての〈フィリピン〉という概念は更新されていく。そこはもはや労働のために目指す場所ではない。当時船で二日かかるほど離れたベンゲットとマニラという二つの場所は、他吉の中で〈フィリピン〉の一語において融合しているのである。

娘さえも失った後、新太郎に対する贖罪にも近い気持ちは、「もうわたいは自分の命をこの孫にくれてやりまんねん」と公言し、また人力車を追って走る孫を見ながら、「マニラで死んだこの子の父親がいまこの子と一しょに走っているのだ」と幻想するように、孫娘の君枝を育てることで贖われるかのように他吉には自覚される。独りで君枝を育ててこそ赦される、真に新太郎を悼むことになるとでもいうかのように、彼はオトラ婆さんとの再婚を拒絶する。

一方で、規範化された他吉の記憶が、孫娘夫婦にも継承されていく事態も認められる。

君枝は、なによりもまず「ベンゲットの他あやんの孫」であり、「体を責めて働く」娘だった。彼女は度々他吉のフィリピンの記憶を想起し、生の規範を自覚し、そこに疑いを挟まない。また、ベンゲットを祖父が苦労し、労働し、一つの難工事を完遂した町、マニラを、父が「ひとりさびしく」死んだ町、すなわち墓所として、二つをプラネタリウムで見た南十字星という媒介を通して積極的に接続してみせる。その場面を引用する。

「――さて、皆さん、ここに南十字星が現われて、わたし達はいよいよ南方の空までやって来ました。時刻はマニラの午前一時、丁度真夜中です。しんと寝しずまったマニラ

の町を野を山を椰子の葉を、この美しい南十字星がしずかに見おろしているのです」

マニラときいて、君枝は睡気からさめた。

「あ」

君枝は声をあげて、それでは祖父はあの星を見ながらベンゲットで働き、父はあの星を見ながらマニラでひとりさびしく死んだのかと、頬にも涙が流れて流星が眼にかすみ、そんな自分の心を知ってプラネタリュウムを見せてくれた次郎の気持が、暗がりの中でしびれるほど熱く来た。

君枝は一見、他吉にベンゲットの挿話を繰り返し聞かされることで、本来彼女が持つはずのない〈記憶〉を共有し、生の規範をなぞり、祖父と孫との閉じられた世界を体現しているかのように見える。しかし実は、祖父がそれまで語ることのなかった南十字星の発見によって実父と祖父とを繋ぎ、かつ捉え返しているように、〈フィリピン〉に新たな意味を創出させてもいるのである。それは、南十字星の見える〈フィリピン〉という土地が祖父―実父―自分という佐渡島家の血脈を伝える記号として再編成されたことを意味している。

また、君枝の夫となる潜水夫の次郎においても、他吉の生の規範は継承される。少年時代の次郎が他吉からベンゲットの話を何度も聞かされていたことを鑑みれば、規範伝達のための訓話も継承されているとみてよい。しかし、このこと以上に次郎にあって顕著なのは、潜水に臨んで「君枝がホースを持っているのだと思えば、次郎はもうどんな危険もいとわぬ気がして、そして、マニラで死んだという君枝の父親の気持が、ふっと波のように潜水服に当って来るのだった」という言い方で次郎の心内に生成された、「マニラで死んだ君枝の父親」に対する奇妙ともいえる同調である。ここにおいて〈フィリピン〉の持つ意味が、他吉とも、また君枝とも異なることが明らかになる。次郎にとって〈フィリピン〉とは、生の規範をもたらす記号であると同時に、君枝が持つホースに象徴されるような、佐渡島家との紐帯をもたらすものでもあるのだ。

記憶とその反芻＝回想は、労働という点において生の規範となり、〈フィリピン〉という土地は血縁と同義に理解され、また、新太郎の死という点を契機に意味を三様に変え、他吉と孫たちとの落差を生み出す。三人の記憶の持ち方は位相を異にしており、単純に「他吉の記憶を若者たちが継承していった」といえない構造になっている。ここに落差を含みつつも、むしろそのために三人がひと繋がりに連なっていくという、連帯の様相が見えてくる。一方で落差が甚だしくなるにつれいっそう記憶が再編され、新太郎と同じ墓に入るという点で結晶化する他吉の〈フィリピン〉に向けられた〈記憶〉に基づく欲望は、終わりなく保持されていくのである。

4　〈フィリピン〉が示すもの

これまで検討してきたように、他吉たちにとっての〈フィリピン〉がさまざまに書き込まれる一方で、『わが町』には執筆・刊行の同時代におけるフィリピンの状況も書き込まれている。

間もなくその年も慌しく押し詰り、大東亜戦争がはじまっ

た。
そして、皇軍が比律賓のリンガエン湾附近に上陸した――と、新聞は読めなかったがラジオのニュースは他吉の耳にも入った。
「ああ、今まで生きてた甲斐があったわい。孫も立派にやってる。曾孫も丈夫に育ってる。もう想い残すことはない。わいの死骸は、マニラの婿といっしょの墓にはいるネや」
ここには太平洋戦争における日本軍の戦績上、最も華々しかったといっても過言ではないフィリピン上陸とマニラ陥落という事実が明記されているし、他吉もそれを聞き知っている。
同時代の戦局は『わが町』にも明確に記述され、物語内時間を規定してもいるのである。この点でこの作品は十分時局に与している。だからこそ、再び「元ベンゲット移民」である他吉のことを振り返れば、彼がマニラ麻を纏っても臣民の見本として讃えられることはなく、現地との関わりも、具体的には明治期の出来事に限定されていたことで、彼にとっての〈フィリピン〉がきわめて私的なものとして記憶の中に保持され、生の規範にさえなることが強調される。他吉にとっては実際の戦果も、新太郎と同じ墓に入るという私的な欲望を成就させる可能性を喚起するためにあり、戦果それ自体が彼の〈フィリピン〉概念に変革をもたらすことはない。いわばそれは同時代の公的な文脈でのフィリピンに関する語りに影響されない強度を保っているのである。私的な欲望に他吉が自閉するこのような在りようは、彼の時局に対する非便乗性を担保しているかのように見える。しかし、時局に与しないと書かれること自体が既に、時局の現状を認める事態を生んでいることも認めつつ、他吉の死という終局時の〈記憶〉をめぐる様相をみていきたい。
欲望に自閉する他吉の在り方をテクスト内部から問いうる存在として、再び君枝と次郎が浮上する。先に、二人が他吉の生の規範を継承したと述べた。しかし、彼らは規範をそれとして受け継いでいるものの、他吉がマニラで同胞によって追い出された敗残者であったことを知らない。そして、新太郎に対する他吉の贖罪意識も、二人共有し得ていない。贖罪意識を持たないことは、他吉の欲望の核心が継承されなかったことを意味する。ゆえに欲望に先鋭化された他吉の〈フィリピン〉に対して、彼らがどのような距離や位置を取るか、そのことが他吉の逝去直後を描出する作品末部で最もよく示される。
次郎はかつて、「蝶柳」で遊んで蝶子や柳吉に意見された時のことを思いだした咄嗟に、
「そうだ、マニラへ行こう」
声に出して呟いた。
「――君枝ももちろん一しょに行くやろ」
蝶子はおくやみが済むと、居合わした人へ遠慮しながら、
「ちょっと……」
と、言って、君枝に眼交した。
マニラ行きを望む次郎に対する君枝の応答は書かれず、テクストからは、彼女がフィリピン行きに対して感じる何物をも看取することができない。しかし、書かれないことが拒否を示すわけではなく、君枝の〈フィリピン〉に対する意志は全く空白

のまま、テクストは閉じられるのである。この事態は他吉の欲望が直接の血縁者である君枝に継承されず、外部の人間だった次郎が新太郎との連帯を通じてそれを果たすことを意味する。

物語内及び単行本刊行時の時局に対応させるならば、目下日本軍は彼の地を占領していたのであり、そこから地続きにあった帝国日本の植民地・フィリピンへ彼女が移住することも、またあり得た事態といえる。テクスト内でもげんに他吉の隣人で落語家の〆団治は、他吉の死の間際に慰問隊としてフィリピンへ旅立った。だからこそ次郎は君枝を誘ったのだ。二人は他吉の死後にあって、テクスト内で「フィリピンに渡ることができるとともにそうしないことができる存在」であると同時に、「フィリピンに渡る自由とフィリピンに渡らない自由」を等しく保存している。この選択可能性は、誰にでも・いつでもある自明のことのようにみえるかもしれない。しかし、これは他吉の欲望が潰えたときにはじめて彼らに備わる権能である。この二者のうち、次郎は「渡る」という選択を実行する。しかし、君枝は次郎の呼びかけに応答したかどうかが書かれないという形で、可能的な存在で在り続ける。その意味で彼女は次郎の欲望すなわち他吉の欲望をテクスト上で無効化しつつも、〈フィリピン〉を保存することができる存在となる。では、その場合の〈フィリピン〉とは一体何を指示しているのだろうか。

再度確認すると、三人は三様の意味の再編を〈フィリピン〉に対して為した。他吉は苦い記憶を消去し、また欲望の結晶化を果たし、後に連なる君枝は自分の血脈を確認する記号を、また次郎は新太郎との相似を確認する記号をそれぞれ創出した。各自の作業を通して差異を生み出しながら、それでもなお〈フィリピン〉という場が彼らをひと連なりにできたのは、彼らの間で共通の記憶、共通の幻視が成立していたからではなく、他吉が記憶を繰り返し言語化したことで堅牢な生の規範を構築し、それが伝播されたからである。君枝と次郎がそれを手にし、また君枝がテクスト内で〈フィリピン〉に関する可能体で在り続けることによって、他吉の尽きぬ夢としての〈フィリピン〉がその特権的な欲望の内容を奪われた時、次のことが明かされるのではないか。すなわち永遠に見えない土地〈フィリピン〉は、非在でありつつ、一般的な案内記や見聞記に表れるような内閉した有機体として想像されることを解除され、連帯の記号として他者間に共有され得ることを証明しているのである。『わが町』は、人が土地に対して何らかのイメージを抱くこと自体が固有の生、あるいは複数の生にどのように作用するか、また、ある特定の土地が人と人との間に共有されるその在り方を、シンプルなノスタルジーや集合的記憶とは異なる論理で形象化してみせたのである。

注

（1）以下全て杉山宛書簡は『織田作之助全集第八巻』（文泉堂出版、昭和五十一年四月）による。

（2）なお、『わが町』と先行する各作品の対応箇所については、宮川康が詳細な検討を行っている。（「織田作之助の「わが町」について」（『日本近代文学』73 平成十七年十月））

（3）「作品解題」（『織田作之助全集第三巻』文泉堂出版、昭和五十一年四月）

（4）『「ベンゲット移民」の虚像と実像―近代日本・東南アジア関係史の一考察―』（同文舘出版、平成元年十一月二十四日）

（5）早瀬は昭和六十二年六月七日、鹿児島テレビで放映された「棄てられた民――フィリピン・ベンゲット道――」のナレーションを引用している。

（6）回顧談については雑誌「海を越えて」昭和十四年十二月号で特集が組まれている。「海を越えて」は財団法人日本拓殖協会が発行。編集後記にある誌友募集の告知では、「雑誌「海を越えて」は、外地及び海外の実情を平易簡明に叙述した月刊雑誌で、国民海外発展の指針として、最適のものたることを確信します」とある。記事になる国や地域には、所謂〈南方〉だけではなく満州やタイといった大東亜共栄圏に包含される国、またブラジル、ペルーなど南米やハワイといった日本人移民の多くいる地域もあり、管見のかぎり情報はフィリピンに特化されたものではない。

（7）「作品解題」（『織田作之助全集第三巻』文泉堂出版、昭和五十一年四月）

（8）他には、①隣人・〆団治の見舞いの言葉に対する「ベンゲットの他あやんは敲き殺しても死なへんぞ」、②オトラとの婚姻の勧めに対する「わいもベンゲットの他あやんと呼ばれた男や。孫ひとりよう満足に育てることが出来んさかい、ややこしい婆さんを後妻に入れたと思われては、げんくそがわるい」、③フィリピンへの渡航が老齢のため難しいと言われた際の「ベンゲットの他あやんが比律賓へ行けん法があるかい」といった箇所が挙げられる。

〔付記〕

『わが町』本文の引用はすべて『定本織田作之助全集　第三巻』（文泉堂書店、昭和五十一年四月）を用いた。

全集頁数	『わが町』本文	③野村愛正『ダバオの父　太田恭三郎』	④渡邊薫『フイリツピン図説』
247上	起工後足掛け三年目の明治三十五年の七月に、七十万ドルの予算をすっかり使い果してなお工事の見込みが立たぬいいわけめいて、	着手して二年足らずの間に七十五萬ドルもつかつた上に工事の見こみが立たないといふ（p.75）	該当箇所なし
247上	「……山腹は頗る傾斜が急で、おまけに巨巌はわだかまり、大樹が茂って、時には数百メートルも下って工事の基礎地点を発見しなければならない。しかも、そうした場所にひとたび鶴嘴を入れるや、必らず上部に地滑りが起り、しだいに亀裂を生じて、遂にはこれが数千メートルにも及ぶ始末である……」	山腹はすこぶる傾斜が急で、巨巌はわだかまり、大樹が茂つて、時には数百米も下つて工事の基礎地点を発見しなくてはならない。しかも、さうした場所に一度鶴嘴を入れゝば、必ず上部に地滑りが起り、しだいに亀裂を生じて、つひにはこれが数千米にも及ぶ。（p.75）	該当箇所なし
247下	もって工事の至難さを知るべしという技師長の報告が、米本国の議会へ送られた時には、土民の比律賓人をはじめ、米人・支那人・露西亜人・西班牙人等人種を問わず狩り集められていた千二百名の人夫は、五メートルの工事に平均一人ずつの死人が出るという惨状におどろいて、一人残らず逃げだしてしまっていた。	▽同年（明治三五（1902）年―引用者注）七月、技師長が委員会に報告した（p.75） ▽翌年（明治三十四（1901）年―引用者注）八月、工事技師を取りかへると同時に、今まで使つてゐた一千人のフィリッピン人の人夫を半分にへらして新しく支那人五百名を入れ、さらに白人（おもにアメリカ人、イスパニヤ人、ロシア人）二百名をくはえて、総勢一千二百名をして日々工事をいそがせだした。（p.74） ▽距離に割つて計算すると、五六米の間に一人づゝの亡骸が埋められてゐることになる。（p.96） ▽フィリッピン人や支那人は、みんなおそれをなして逃げてしまつた（p.86）	該当箇所なし
247下	工事監督が更迭して、百万ドルの予算が追加された。新任のケノン少佐はさすがにこれらの人	また〳〵本国政府に申請して一百萬ドルの予算をもらつた。これに力をえて、ケノンといふ陸	該当箇所なし

	種の恃むに足らぬのを悟ったのか、マニラの日本領事館を訪問して、邦人労働者の供給を請うた。	軍少佐を新しく主任として工事の監督を命じた。（p.76）	
247下	カリフォルニヤを開拓した日本人の忍耐と努力を知っていたからであろうか。	「この工事を完成させるのは、カリホルニヤの荒野を花園とし、日清戦争に見事に勝つた、あの勤勉でねばり強い日本人のほかに世界中にはない。」／といひだした（p.76）	該当箇所なし
247下	領事代理の岩谷書記は神戸渡航合資会社の稲葉卯三郎をケノン少佐に推薦した。稲葉卯三郎が通訳長尾房之助を帯同、政庁を訪れると、ケノン少佐は移民法に抵触してはならぬからと口頭契約で、人夫九百名、石工千名、人夫頭二十名、通訳二名、合計千九百二十二名の労働者の供給を申込んだ。	（ケノンは―引用者注）その年（明治三十五（1902）年―引用者注）の六月十八日、日本領事館を通じて斡旋をたのみ、神戸渡航会社（手数料をとつて移民の世話をする会社）の代理人稲葉卯三郎との間に、大体次のやうな契約をした。／(1)人夫九百名。石工一百名。人夫取締二十名。合計一千二十名。／給料は、人夫日給一ペソ二十五セント。石工同二ペソ。取締同二ペソ五十セント。／ほかに、通訳月給百八十ペソと百ペソの二名。／(2)食事、宿舎、医薬等はすべて官費。／(3)第一回の移民は九月三十日までにマニラに到着のこと。二回以後は、人数のまとまり次第月々移入する。／(4)労働は一日中時間。契約一ヶ年。（p.77）	時の領事代理岩谷書記生は、神戸渡航合資会社の稲葉卯三郎氏を推薦、同氏は通訳長尾房之助氏を伴ふて政庁にケノン少佐を訪れたが、ケ少佐は移民法に接触する事があつてはいけないと、単に口頭契約で大略次のやうな人夫の供給を申し込んだ。／人夫　九〇〇名　石工　一〇〇名　人夫頭　二〇名／通訳　二名　合計　一〇二二名（p.54）
248上	日給は道路人夫一ペソ二十五セント、石工二ペソ、人夫頭二ペソ五十セント、通訳は月給で百八十ペソと百ペソ、労働時間は十時間、食事及び宿舎は官費で病気の者は官営病院で無料治療	▽この時の行列は見もので、股引、腹掛、脚絆に草鞋ばき、中にはねぢ鉢巻もまじつて、住民に眼を見はらせてどう〳〵と異郷の地をねつて行くのだ。（p.80） ▽自分たち（白人やフィリピン人―引用者注）十月十六日、第一回移民百二十五人が東洋汽船香港丸でにぎやかにマニラに到着した。（p.79）	該当箇所なし
248上	第一回の移民船香港丸が百二十五名の労働者を乗せて、マニラに入港したのは明治三十六年十月十六日であった。	股引、腹掛、脚絆に草鞋ばき、ねじ鉢巻きの者もいて、焼けだされたような薄汚い不気味な恰好で上陸した姿を見て、白人や比律賓人は何かぎょっとし、比人労働組合は同志を糾合して排斥運動をはじめ、英字新聞も日清戦争の勇士が比律賓占領に上陸したと書き立てた。	第一回の移民船香港丸が一二五名の労働者を乗せて明治三十六年十月十六日にマニラに入港、翌日無事上陸したが、其服装たるや関東大震災の避難者以上であつたといふのだからすごい、英字新聞は素より比人労働組合も同志を糾合して邦人排斥の声は高くなつた。（p.56）

248上	百二十五名の移民はマニラで二日休養ののち、がたがたの軽便鉄道でダグバンまで行き、そこから徒歩でベンゲットの山道へ向った。		の職場の荒らされるのを心配して、／「あれはほんたうの日本の労働者ではない。日清戦争の勇士がばけて来たんだ。」／「今にフィリッピンは日本に占領される！」／などと、まるでありもしない流言をふれてまはる。そのあとについて労働者組合が躍起となつて排斥運動をはじめ、新聞もさかんに日本人の悪口を書いて、一時はどうなるかわからないほどの騒ぎになつた。（p. 80）
248上	まず牛車を雇つて荷物を積み込み、そして道なき山を分け進んだが、もとより旅館はなく日が暮れると、ごろりと野宿して避難民めいた。／鍋釜がないゆえ、飯は炊けず、持つて来たパンはおおかた蟻に食い荒らされておまけにひどい蚊だ。		（移民は―引用者注）タグバンまではがた〳〵汽車で、それから歩いて勇躍ベンゲットに向かつた。（p. 80）
248下	彼等は綱でからだを縛って、絶壁を下りて行った。／そして、中腹の岩に穴をうがち、爆薬を仕掛けるのだ。点火と同時に、綱をたぐって急いで攀じ登る。とたんに爆音が耳に割れて、岩石が飛び散り		牛車（カルトン）を雇つて荷物を積みこんで山を分けはじめたが、もとより途中に旅館などのあらう筈はない。日が暮れると路傍の地上にごろりと横になつて猛烈な蚊にせめられ、おまけに鍋釜がないので飯は炊けず、持参のパンは蟻にやられてだめになるといふ有様で、第一歩から早くもいひやうもない困難に襲はれた。（p. 81）
248下	十一月にはコレラで八人とられた。	該当箇所なし	断崖に取組む人たちは、みな綱で自分のからだをゆはへて下つて行つた。そして中腹の岩に穴をうがち、そこに爆薬をしかけて、／「おゝい、いゝか、やるぞ！」／爆音があたりに反響して、大小無数の岩石が飛沫のやうにとび散る。（p. 82）
249上	マニラ鉄道会社やマランガス・バタアン等の炭	該当箇所なし	該当箇所なし
			該当箇所なし
			該当箇所なし
		明治三十六年の十一月にコレラのため七名は遂に尊い人柱となり（p. 59）	該当箇所なし
			マニラ鉄道会社に雇はれるもの、兵舎建築の雑

鉱へ雇われた少数を除き、			
249上	249上	249上	249上
一ペソは一円に当る。	宿舎というのは、竹の柱に草葺の屋根で、土間には一枚の敷物もなく、丸竹の棚を並べて、それが寝台だ。蒲団もなく、まるで豚小屋であった。	虫の喰滓のような比島米で、おまけに鍋も釜もないゆえ、石油鑵で炊くのだが、底がこげついても、上の方は生米のまま、一日一人当り一ポンド四分ノ三という約束の量も疑わしい。	副食物は牛肉又は豚肉半斤、玉葱又はその他の野菜若干量という約束のところを、二三尾の小鰯に、十日に一度、茄子が添えられるだけであった。
一ペソは日本のほぼ一円で、当時フィリッピン人の日給は五十セントだった（p.78）	それは人間の住居ではない。日本の豚小屋――いや、もつとひどかつた。／竹の柱に、草葺の屋根はいいとする。土間には一枚の敷物もなく、まはりに蠶棚のやうに七十糎おきくらゐに丸竹の棚が幾段も取りつけられてある。これが寝台なのだ。もちろん蒲団などのある筈もない。（p.83）	それに、食物だ。なるほど、米はフィリッピン米が来るが、鍋も釜もないので、せんかたなく石油鑵で飯を炊く。ところが、底はこげついても、なかごろはまだじくじくして、上の方は米のまゝである（p.83）	副食物といへば二三尾の小鰯があたへられるだけで、野菜のやうなものは見たくもなかつた。（p.83）
役夫、マランガズ、バタアン等の炭工夫に入つたものもある。（p.58）	該当箇所なし	食事は一日一人当り比島米一封度四分三、（略）その比律賓米と来たら、今頃東京辺に配給される赤米所の騒ぎではない。よい所は虫が喰べた其滓で、飯の形こそして居るが全然腹ごたへがなかつた由である。（p.58）	牛肉又は豚肉半斤、魚肉半斤、玉葱又は其他の野菜若干量といふ事になつて居るから、量が間違ひなく支給されたら誰一人不平を唱へるものも居ないのだが、肉半斤はおろか虫眼鏡で探さなければ見当らないやうな細片がたまにある位のもの、魚はカラカラの塩鰯が一尾か二尾、野菜は三度三度茄子ばかり（p.58）
	該当箇所なし		該当箇所なし

249上	雨期になると、早朝から濡れ鼠のまま十時間働いてくたくたに疲れたからだで、着がえもせず死んだようになって丸竹の寝台に横たわり、一晩中蚊に食われているという状態
249上	雨期などは朝から濡れ鼠のまま十時間も働いて、夕方になつてくた〳〵に疲れて帰つて来ると、着のみ着のまゝ丸竹の寝床にごろりと眠るのだ。一晩中蚊に刺されどほしの上、避暑都市を建設しようとする土地だけあつて、明け方の寒さは骨身に沁みとほる。（p.84）

249下	三十七年の七、八、九の三ヵ月間に脚気のために死んだ者が九十三人であつた。平均一日に一人の割合である。なお、マラリヤ、コレラ、赤痢で死ぬ者も無論多かつた。	該当箇所なし	大体風土病としてはマラリヤを挙げる位のものであるが、脚気や、赤痢、コレラといふものが却つて多く三十七年七、八、九の三箇月間に脚気のため死んだもの九三人といふ記録だから、食料の配給がどうであつたかを窺ひ得るだらう。（p.59）
249下	赤痢にもキナエンを服まされた。なお、病院で食べさせられる粥は米虫の死骸で	病人は契約どほり病院へ送られるのだが、この病院がまた全くの無責任とでたらめで、食べさせる粥は米蟲の死骸でいつぱい、おまけに赤痢とわかつてゐる病人にさへキニーネ（マラリヤの薬）ばかり服ませてゐたといふのだ。（p.84）	該当箇所なし
249下	鶴田組の三百名はとうとう人夫頭といっしょに山を下ってしまった。	該当箇所なし	金もほしいし名もほしいが、命あつてのもの種だと、鶴田某の監督して居る労働者三〇〇名は遂に就業を断念、人夫頭と共に山を下つたが、待遇改善の和議が成立して従来通りの工事を続ける事になつたやうな出来事もあつた。（p.59）
249下	マラバト・ナバトの兵営建築工事か、キャビテ軍港の石炭揚げよりほかになく、日給はわずかに八十セントで、うち三十五セントの食費を差し引かれるようではお話にならず、また、比律賓人の空家にはいりこんで自炊しながらの煎餅売りも乞食めく。	▽マラバト・ナバトといふところに建築中だつた兵営の仕事に三百名、キャビテ軍港の石炭揚げ人夫に百名ほど行つたが、日給はわづか八十セントで、その中から食費三十五セントを引かれるので話にならない。（p.88） ▽そのころ、やはりベンゲットを下りて来た数人のものが、旅館に泊る金もないので、フィリッピン人の空家にはいりこんで自炊をしながら、煎餅などを売り歩いて乞食のやうな暮しをつゞけてゐた。（p.88）	該当箇所なし
249下	関西移民組合から派遣されてきたという佐渡島他吉が	該当箇所なし	明治三十七年中の移民割当は次の通りであつた。／海外渡航会社四六一名（中略）此の外には山陽、中国、東京、防長、関西等の移民組合

250上	サノサ節で、／「一つには、光りかがやく日本国、日本の光を増さんぞと、万里荒浪ね、いといなく、マニラ国へとおもむいた」	そのころ、みんなの間でよく唄はれたサノサ節といふ歌に、／一つには、光りかゞやく日本国、日本の光を増さんぞと、萬里荒波ね、いとひなく、マニラ国へとおもむいた。／五つには、いつかマニラで大金儲け、日本国にと送らんせ、思へば軽きね、身の難儀、どんな辛苦も苦にやならぬ。／などといふのがある。（p. 86）	もあつた。（p. 57）
250上	三十七年の十月の或る夜、暴風雨が来て、バギオとは西班牙語で暴風のことだと思いだした途端に、小屋が吹き飛ばされ、道路は崩れて、橋も流された。それでも腑抜けず、ぶるぶるふるえながら夜を明かすと、死骸を埋めた足で早速工事場へ濡れ鼠の姿を、首垂れて現わした。	▽バギオといふのはイスパニヤ語の暴風の意味だ。（p. 72） ▽一九〇四（明治三十七年）十月のある夜、こゝにおそろしい大あらしがおそひかゝつた。／車軸を流すほどの風雨は、山肌を洗つて幾十もの瀧をつくつた。小屋といふ小屋は、残らず底知れぬ絶壁の下へ吹き飛ばされた。／苦心の道路は、ずた〳〵に切りきざまれるやうに崩れた。橋も全部壊れた。／夜を震へながら明かした同胞は、翌日になると、またたくさんの新しい墓穴を堀（ママ）らねばならなかつた。数へきれないほどの負傷者と、長い時間を雨にうたれてゐたため急に増えて来た病人は、屋根もない野天のあそこゝに枕をならべて烈日にさらされた。（p. 95）	該当箇所なし
250下	マニラのキャッポ区に雑貨商を出している太田恭三郎が、アメリカ当局と交渉して、ベンゲット移民への食料品納入を請負い、味噌、醤油、沢庵、梅干などを送って来てくれた	▽キャッポ区の角から二軒目に雑貨商を出してゐる太田恭三郎といふ人は、年は若いがなか〳〵しつかりしてゐて、英語が非常によくできるといふことだ。（p. 89） ▽アメリカ当局もはじめて冑をぬいで、それでは君が食物を納入してはどうかと、その権利を	該当箇所なし

	恭三郎にあたへた。（p. 92） ▽おゝ！　沢庵に梅干！　日本人にとつてなんといふなつかしいものだらう。そればかりではない。味噌がある、醤油がある、鍋や釜も来た（p. 94）	該当箇所なし	
250下	千五百名の邦人労働者のうち六百名を超える犠牲者があった	こゝで働いたわが日本人の数は、前後では千五百人だといはれる。その半ばの、約七百人が犠牲となつてたふれた。（p. 96）	該当箇所なし
251上	「皆んな、ダバオの麻山へ働きに行け！」	恭三郎は躍起になつて、／「ダバオへ行け、ダバオへ……！」／と、声をからして叫びつゞけ、先輩や友人まで動員して説いてまはる。この熱心さに耳を傾けたといふより、食ふに食へなくなつた人たちが、また一組二組と渡つて行つた。（p. 119）	該当箇所なし
251上	マラリヤのたちの悪さはベンゲット以上で	こゝのマラリヤは非常にたちが悪かつた。（中略）キニーネ一服飲ませてやらうにも医者もゐないのだ。（p. 113）	該当箇所なし
251上	日本人の医者も連れて行く、味噌も野菜も送ってやる	恭三郎は、その同じ船（日本人医師を乗せた船―引用者注）で、米や、小豆や、味噌、醤油、沢庵なども送つた。（p. 117）	該当箇所なし
251上	マニラからぼろ汽船で二十日近く掛ってダバオにつき、遠くの森から聴えて来るバゴボ族の不気味なアゴンの音に肝をひやしながら	▽小さなぼろ汽船に乗りこんだ百八十名のわが第一回の移民たちは、マニラから二日近くもかゝつてやうやくダバオ湾にはいつた。（p. 110） ▽（ダバオは―引用者注）山奥に巣くふ蛮人バゴボ族や、海岸に出没するモロ族のほか、働く人間はまるでゐない。（p. 105） ▽（バゴボ族の人間狩りの後―引用者注）さかんな祝宴が開かれ、アゴン（一種の鐘）の音が	該当箇所なし

		遠くまで気味悪く森にこだまして、夜を徹して酒を飲んでをどり狂ふ。これが日本人のはいつて行つた頃のミンダナオ島の姿だつたのである。（p.110）	
251上	バギオにサンマー・キャピタル（夏の都）がつくられて	その後、バギオには、美しい家々が、濃い緑の森の中に点々と絵のやうに立ちならんで、東洋第一といはれるサンマー・キャピタル（夏の都）ができあがり、アメリカ総督の官邸もあつて、四月から八月までの五ヶ月の間は、こゝに政庁がうつつて、一切の政治をとるやうになつた。（p.98）	該当箇所なし
252下	僅かな貯えを資本にはじめたモンゴ屋（金時氷や清涼飲料の売店）ははやらなかった。	該当箇所なし	其後（ベンゲット道路完成後―引用者注）は日本人即大工であり、マニラ附近ではモンゴ屋（金時氷や清涼飲料を売る店）が其代名詞であつた程、この職業に従事するものが多かつた。（p.61）